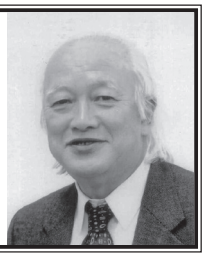
学校NOW! 学校歳時記

アクティブ・ラーニングの展開



教育創造研究センター所長　髙階（たかしな）　玲治（れいじ）

1　アクティブ・ラーニングが目指すもの

アクティブ・ラーニング（ＡＬ）の言葉が急速に広がっている。それと同時にある種の疑問や課題が見いだされる。例えば，ＡＬは子どもの「対話的な活動」が主だから，「活動あって学びなし」に陥るとか，基礎の学びが不十分になって学力低下が起きないか，などの疑問である。また子ども主体のカリキュラム・マネジメント力が難しいとする考えもみられる。

確かに，新たな教育のあり方の導入は確実な定着までに紆余曲折が予想される。そこで必要なのは，新たな教育のあり方を正しく理解し，受容し，実践化することである。

そこで，ＡＬの基本になる学力の３つの柱に注目したい。中教審の『論点整理』に示されたのは，現行の学力を発展させた次の３点である。「何を知っているか，何ができるか（個別の知識・技能）」「知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）」「どのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るか（学びに向かう力・人間性等）」

現在言われている学習内容の確かな習得としての基礎的な知識や技能，またそれらを生かした活用力等の重視は今後も変わらない。

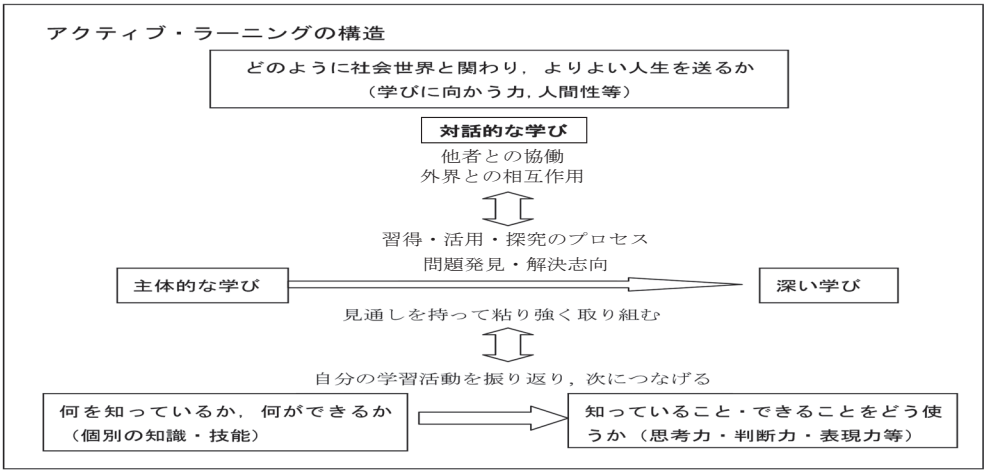
さらに，ＡＬは，この３つの柱を受けて次の３つの観点を基本にしている。

①習得・活用・探究という学習プロセスの中で，問題発見・解決を念頭においた深い学びの過程が実現できているか。

②他者との協働や外界との相互作用を通じて，自らの考えを広げ深める，対話的な学びの過程が実現できているか。

③子どもたちが見通しを持って粘り強く取り組み，自らの学習活動を振り返って次につなげる，主体的な学びの過程が実現できているかどうか。

簡略して言えば，①は「深い学び」，②は「対話的な学び」，③は「主体的な学び」である。この３つの観点はＡＬの基本とされている。



２　主体を育む教育の必要

これら３つの観点を授業に組み入れるためには，組み替えが必要である。③→②→①→③の学習過程の流れである。

そこで，先に述べた学力の３つの柱とＡＬの３つの観点を組み合わせて図解すると図のようになる。図でわかるように，学習活動の最初から最後まで貫くのは「主体的な学び」である。つまり，ＡＬの基本は，「主体的な学び」であって，その活動が「深い学び」に向かって展開する過程で「対話的な学び」を必要とするのである。重要なのは，３つの観点の相互関連である。

だが，なぜ「主体的な学び」が学習過程の基本を貫くのか。それはわが国の子どもの自立的な学習態度に関わっている。

周知のように，OECD の PISA の 2012 年の調査の結果は，加盟国中では「読解力」と「科学的リテラシー」ではトップ，「数学的リテラシー」は２位というＶ字回復を果たしている。しかし，なお課題が残っている。次期教育課程についての中教審への「諮問」には次のような指摘がみられる。

①判断の根拠・理由を示しながら自分の考えを述べることが不得手である。②自己肯定感，学習意欲，社会参画の意識が低い。③自信を育み能力を引き出すことが十分でない。

これを受けて中教審の『論点整理』は，その冒頭部分で「予測できない未来に対応するためには，社会の変化に受け身で対処するのではなく，主体的に向き合って関わり合い，その過程を通して，一人一人が自らの可能性を最大限に発揮し，よりよい社会と幸福な人生を自ら創り出していくことが重要である。」と述べている。まさに主体性重視の考え方である。

３　創意あるカリキュラム・マネジメント

紙幅の関係で詳しくは述べられないが，ＡＬをカリキュラム・マネジメントする場合，次の点に留意する必要がある。

①単元の導入において個々の子どもが課題に向き合ったとき，課題追究の関心や意欲を高める動機づけに留意する。既習の学習を援用するなど，課題解決のための予測をしたりして単元全体の見通しを持つことが重要になる。

②課題の追究過程では，自分の考えをしっかり持ち，また仲間との対話によって考えを深める。個別，小集団，一斉の学習形態を効果的に行いながら，協働意識を高める。

③「外界との相互作用」とあるように，学習対象に応じた適切な学習方法を選ぶ。仮説→検証の問題解決学習，実験・観察，見学・調査，ものづくりなど，学習方法によって他者との協働の在り方が変わるだけでなく，「深い学び」の質も変わる。

④どのような学習対象かによって，習得，活用，探究を求める「力」の獲得が変わる。学習目標との関連に十分留意する。

⑤単元の学習の過程や終末など，自分の学習を振り返る機会を持つ。何を知り，さらに知ったことを学習過程でどう活用したか，それが次の学習にどうつながるか，を子ども個々が自覚的に考えることを大切にする。

⑥ただ，ＡＬの学習は時間消費型であるため，あれもこれも学習過程に組み込むことは難しい。学習目標に応じて重点化したり，最適化の方策を考える必要がある。

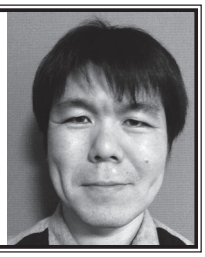
アクティブ・ラーニングは，今からでも実施可能な学習形態である。子ども個々の主体的な学習態度を育てるためにも，ＡＬの積極的な展開が望ましいのである。

学校NOW! 笑顔をとりもどせ

組織的な生徒指導体制の在り方

～前任校での取組から～

柏市立手賀東小学校教諭
（元我孫子市立根戸小学校）　藤田（ふじた）　豪司（あきじ）



1　本校の概要（我孫子市立根戸小学校）

本校は，市の北西部に位置し，東に手賀沼，西に利根川があるなど，自然環境に恵まれている。児童数は平成12年頃から増加し，昨年度は約1250人であった。大規模校である。

2　学校での取組

⑴根戸小の三行

「さわやか挨拶」「一生懸命清掃」「てきぱき行動」※根戸小学校の「伝統」として受け継がれている。

⑵教育相談週間（全児童対象）

①年２回（６月・11月）に実施する。
②一人一人と話す機会を設け，全員の児童と話をする。個別対応や支援が必要な場合は校内委員会等にかけ，早急に対応する。
③主に，担任が児童と話すが，他の職員と話すこともできる。

⑶各種アンケートの活用

①「いじめに関するアンケート」を毎年２回実施している。アンケートをもとに教育相談等を行い，いじめの解決や未然防止に生かしている。アンケートは市内共通のものを活用している。
②「学校生活に関するアンケート」（年１回）「QU検査」（年２回）を行い，児童の実態を把握するとともに，結果を学校経営や学級経営に生かしている。

⑷生徒指導の機能を生かした分かる授業の展開

「豊かな人間関係をつくることのできる子どもの育成」を研究主題とし，研究に取り組んでいる。一昨年度は算数科を中心に，主に小集団活動の場面で，学び合いの要素を取り入れ，「分かる授業」の実現に努めた。

また，昨年度は体育科を中心に，お互いを認め合える人間関係づくりに努めている。

⑸心の相談室の活用・スクールカウンセラーや心の相談員との連携

⑹あいさつの励行

①みんなであいさつ運動
（ア）学期毎に１回，年間３回実施する。
（イ）各学級の児童を５つのグループに分け，正門などの５箇所で生活委員会の児童と挨拶を呼びかけ，その大切さを認識させる。
②あいさつ大作戦
全校児童に「あいさつカード」を配り，挨拶ができたらポイントをつけられる。一定のポイントを貯めれば，賞状がもらえる。
③「あいさつチャンピオンはだれだ！？」
１日に挨拶を10回以上すると，カードに「○」をつけられる。10日間で「○」が一定数以上になると，生活委員から，「認定シール」をもらえる。

⑺「いじめ０月間」（11月）

①道徳等の時間を使い，いじめ防止につながるような内容で授業を行う。（友達のいいところさがし・ピアサポート・副読本等）
②「いいところさがし週間」を設け，「いいところさがしカード」を活用する。
③１～３年は学級ごとの「心のめあて」を立て，学級内に掲示する。４～６年は，各学級でいじめ防止につながる標語を作成する。

3　終わりに

これらの取組を多種多様な連携を通じて組織的に行うことにより，効果がより高まった。今後も組織的な体制づくりに努めたい。

千葉歴史の散歩道

奈良・平安時代の人たちの生活と文字資料

県教育庁教育振興部文化財課発掘調査班・上席文化財主事　黒沢（くろさわ）　崇（たかし）

教科書等の記述では，奈良時代になると律令制と戸籍･税制などの支配体制が整えられ，天皇を中心とした中央集権国家が確立したとされる。その中で，都の貴族や役人に比べ，一般の人たちは質素でつつましい生活をしていたと対照的に描かれる。また，文献史料には税に苦しむ様子や都での労役から逃亡する人の記載があり，住まいも古墳時代から変わらず平安時代前半に至っても竪穴住居で生活していたことがそのイメージをつくり出しているように思える。

正倉院文書などの文献史料や宝物がしめす内容は，当時の政治や生活の様子を復元する第一級の資料であるのは間違いない。しかし，都や役所側の視点でつくられた文献史料には，一般の人たちの日常の暮らしについての記述は非常に少なく，その限定された資料だけで当時の千葉県の様子を明らかにすることはできない。

一方，地中に遺された生活の痕跡を明らかにする発掘調査は，一般の人たちの集落跡も対象に実施される。千葉県ではこれまでに奈良・平安時代の遺跡を 700 か所以上調査しているが，そのほとんどが一般の集落跡である。毎年，奈良・平安時代の遺構や遺物が発見され，当時の生活の様子や集落景観を復元していくための基礎資料が蓄積され続けている。

これらの資料の中には，土器や瓦などに文字が記されたものがあり，律令制の定着や仏教信仰の浸透に伴い，文字が役所のみならず一般の集落でも使用されていたことをうかがわせる。特に，墨で文字を書いた墨書土器の出土例は多く，千葉県での出土数は全国トップで，２万点を超えるという。その文字の内容は，当時の地名，人名，寺などの施設の名称のみならず，時に人々の神や仏に対する信仰などを明らかにする手がかりをあたえてくれる。

たとえば，県指定文化財に指定されている香取市吉原三王（よしわらさんのう）遺跡出土の墨書土器資料群の中には「□香取郡大坏郷中臣人成女替（かとりぐんおおつきごうなかとみひとなりめ）□」などと書かれた墨書土器がある。古代の行政区分は国－郡－郷（現在の県－市町村－地区・集落）の単位とされていたが，現在の香取市返田・大根周辺とされる香取郡大槻（坏）郷に中臣人成という人物が住んでいたことや，家族の女性のための捧げ物をした様子などをうかがい知ることができる。

このように古代の地域社会は，文献史料だけではなく，発掘調査の成果や地名などの多様な資料を組み合わせながら少しずつ描き直されている。

吉原三王遺跡出土墨書土器
（千葉県教育委員会）

千葉教育　萩（No.６３９）　平成２８年８月２５日発行
編集・発行　千葉県総合教育センター　（代表）安　藤　久　彦
〒261-0014 千葉市美浜区若葉２－１３　ＴＥＬ０４３－２７６－１２０４
ＵＲＬ　http://www.ice.or.jp/nc
印　刷　所　株式会社白樺写真工芸
〒263-0002 千葉市稲毛区山王町１０２－５　ＴＥＬ０４３－４２３－１１０１